ブタ飼い

ハンス・クリスチャン・アンデルセン　Hans Christian Andersen

矢崎源九郎訳

青空文庫

むかしむかし、ひとりの貧しい王子がいました。王子は一つの国をもっていましたが、それはとても小さな国でした。でも、いくら小さいとはいっても、お妃をむかえるのに、ふそくなほどではありませんでした。さて、この王子はお妃をむかえたいと思いました。

それにしても、この王子が皇帝のお姫さまにむかって、「わたくしと結婚してくださいませんか？」などと言うのは、あまりむてっぽうすぎるというものでした。けれども、王子は、思いきって、そうしてみました。なぜって、王子の名前は遠くまで知れわたっていましたし、それに、王子が結婚を申しこめば、よろこんで、はい、と、言いそうなお姫さまは、何百人もいたからです。ところで皇帝のお姫さまは、はい、と、言ったでしょうか？

では、わたしたちは、そのお話を聞くことにしましょう。

王子のおとうさまのお墓の上には、一本のバラの木が生えていました。それは、なんともいえないほど美しいバラの木でした。花は五年めごとにしか咲きませんが、そのときにも、ただ一りんしか咲かないのです。でも、そのにおいのよいことといったら、またとありません。一度そのにおいをかぐと、だれでも、どんないやなことも、心配ごとも、忘れてしまうほどでした。王子はまた、一羽のナイチンゲールを持っていました。このナイチンゲールは、たいへんじょうずに歌をうたうことができました。その小さなのどの中には、美しい節が、いっぱい、つまっているのではないかと思われました。王子は、このバラの花と、ナイチンゲールを、お姫さまにさしあげようと思いました。そこで、さっそく、その二つを大きな銀の入れ物に入れて、お姫さまのところへ持っていかせました。

皇帝は、その贈り物を大きな広間に運びこませて、自分も、あとからついていきました。その広間では、お姫さまが侍女たちと、「お客さまごっこ」をして、あそんでいました。お姫さまたちには、ほかのことは、なんにもできなかったのです。お姫さまは、贈り物のはいっている、大きな入れ物を見ると、大よろこびで手を打ちました。

「かわいらしい小ネコが、はいっていますように！」と、お姫さまは言いました。——ところが、出てきたのは、美しいバラの花でした。

「まあ、なんてきれいに造ってあるのでございましょう！」と、侍女たちが、口々に申しました。

「きれいどころではない！」と、皇帝は言いました。「なんと言ったらいいのか！　じつに美しい！」

ところが、お姫さまは、花にさわってみて、もうすこしで泣き出しそうになりました。

「まあ、いやですわ、おとうさま！」と、お姫さまは言いました。「これは造ったお花ではなくって、ほんとのお花ですわ！」

「あら、いやですこと！」と、侍女たちも、口をそろえて言いました。「ほんとのお花でございますわ！」

「さあ、さあ、おこっていないで、もう一つのほうに、何がはいっているか、見ようではないか」と、皇帝は言いました。すると、今度は、ナイチンゲールが出てきました。そして、ナイチンゲールはたいそう美しい声で歌をうたいましたので、だれもこの鳥には、すぐに文句の言いようがありませんでした。

「シュペルブ！　シャルマン！（まあ、すてき！　うっとりするよ

うですわ！）」侍女たちは、みんなフランス語がしゃべれましたので、フランス語でこう言いました。ひとりが、なにか言いだすと、そのたびに、だんだん大げさになっていきました。

「この鳥のうたうのを聞いておりますと、わたくしには、おかくれなさいました皇后さまの、音楽時計が思い出されます！」と、年とった家来が申しました。「ああ、それ、それ、声も、歌も、まったく、あのとおりでございます！」

「そうじゃな」皇帝はこう言って、まるで小さな子供のように、泣きました。

「でも、ほんとの鳥とは思われませんわ」と、お姫さまが言いました。

「いいえ、ほんとの鳥でございます」と、贈り物を持ってきた、使いの者たちが、言いました。

「それじゃ、そんな鳥、とばせておしまいなさい！」と、お姫さまは言いました。そして、王子が来るのを、どうしても承知しようとはしませんでした。

しかし、こんなことがあったって、王子のほうは平気です。そのくらいのことでは、ひっこんでいません。すぐさま、顔に茶いろや黒のきたない色をぬりつけ、帽子を深くかぶって、御殿の門の戸をたたきました。

「ごめんください、皇帝さま！」と、王子は言いました。「この御殿で、わたくしを使ってくださいませんか？」

「さようか、働きたいと言ってくる者が、ずいぶんいるからのう」と、皇帝は言いました。「だが、ちょっとお待ち。――そう、そう、ブタの番をする者が、だれかひとり入用じゃ。なにしろ、ブタがたくさんいるのでのう！」

そこで、王子は、御殿のブタ飼いにやとわれました。そして、下のブタ小屋のそばに、みすぼらしい小さな部屋を一ついただいて、そこに住むことになりました。

王子は、一日じゅう、そこにすわって、いっしょうけんめい、なにかを作っていました。そして夕方ごろには、もう、かわいらしい、小さなつぼを作りあげていました。つぼのまわりには、鈴がついていました。つぼの中のお湯がわくと、その鈴はたいへん美しい音色（ねいろ）をたてて、リンリンと鳴るのです。そして、

ああ、いとしいアウグスチン、
もうおしまいよ、なにもかも！

という、むかしからの、なつかしい節をかなでました。

けれども、このつぼには、もっともっとじょうずなしかけがしてありました。そのつぼの中から立ちのぼる湯気に指をつけると、町じゅうの台所で、いまどんな料理が作られているかを、ここにいながら、たちまち、かぎわけることができるのでした。ね、これはまた、バラの花とは、まったくちがっているでしょう。

さて、お姫さまは侍女たちを連れて、散歩に出かけました。ふと、この節を耳にしますと、立ちどまって、たいそううれしそうな顔をしました。「ああ、いとしいアウグスチン！」というこの節なら、お姫さまも、ピアノでひくことができたからです。もっとも、これだけが、お姫さまにできる、たった一つの節でしたが。それも、一本指でひくのでした。

「あれは、あたしにもひける節よ」と、お姫さまは言いました。
「あのブタ飼いは、きっと、学問のある人にちがいないわ。ねえ、あそこへ行って、あの楽器のおねだんをきいてきてちょうだい」
こういうわけで、侍女のひとりが、その中へはいっていかなければならないことになりました。けれども、侍女は、まずその前に、木の上靴にはきかえました。――
「そのつぼは、いくらでゆずっていただけるの？」と、侍女はたずねました。
「お姫さまのキスを十ください」と、ブタ飼いは答えました。
「まあ、とんでもない！」と、侍女は言いました。
「でも、それ以下では、お売りできません」と、ブタ飼いは言いました。
「ね、なんと言って？」と、お姫さまはたずねました。
「とても、あたくしには申しあげられませんわ！」と、侍女は申しました。「だって、あんまりでございますもの！」
「じゃ、そっと言ってちょうだい」そこで、侍女は、お姫さまにそっと申しあげました。
「まあ、なんて失礼なひとなんでしょう！」そう言うと、お姫さまはいそいで歩き出しました。――ところが、ほんのちょっと行ったかと思うと、もうまた、あの鈴が、かわいらしい音をたてて、鳴り出しました。

ああ、いとしいアウグスチン、
もうおしまいよ、なにもかも！

「ねえ」と、お姫さまは言いました。「あたしの侍女たちのキスを十でもいいかって、きいてきてちょうだい」
「いいえ、ごめんこうむります」と、ブタ飼いは言いました。「お姫さまからキスを十いただかなければ、つぼはおゆずりできません」
「なんて、いやなことを言うんでしょう！」と、お姫さまは言いました。「じゃ、だれにも見られないように、みんな、あたしの前に立っていておくれ」
そこで、侍女たちは、お姫さまの前に立ちならんで、スカートのはしをつまんで、ひろげました。そこで、ブタ飼いは、お姫さまからキスを十もらいました。そして、お姫さまは、ブタ飼いからつぼをもらったのです。
さあ、これはおもしろいことになったと、みんなは大よろこびです。夜も昼も、つぼの中のお湯を、チンチンわかせておきました。この町の中なら、ご家来のお屋敷でも、靴屋の家でも、いまその台所で、どんな料理が作られているか、わからないような家は、一けんもありませんでした。侍女たちは、踊りながら、手をたたいてよろこびました。
「あたしたちには、だれが、おいしいスープとパンケーキを食べるのか、ちゃんとわかりますのよ。それから、オートミールとカツレツを食べるのは、だれだかも、みんな知ってますのよ。ほんとに、おもしろいったらありませんわ！」
「ほんとにおもしろうございますわ！」と、侍女の頭が言いました。
「そうね、でも、だまっていなくてはいけませんよ。あたしは、皇帝の娘なんですからね」
「はい、はい、そうでございますとも」と、みんなは、口をそろえ

て言いました。

　あのブタ飼いは、ほんとうは王子なんですが、だれも、そんなことは、夢にも知りません。ただ、ほんとうのブタ飼いとばかり、みんなは思いこんでいました。ところが、このブタ飼いは、一日もむだに日を送るようなことはしません。また、何かやっていましたが、見ると、今度はガラガラを作りました。それを振りまわせば、世の中に知られている曲という曲、ワルツでも、ギャロップでも、ポルカでも、どんな曲でも、鳴らすことができるのでした。

「まあ、すてき！」と、お姫さまは、そこを通りかかって、言いました。「こんな美しい曲は、あたし、まだ聞いたことがないわ。ねえ、あそこへ行って、あの楽器のおねだんをきいてきてちょうだい。でも、もうあたし、キスはいやよ」

「お姫さまのキスを百、いただきたいと申しております」ききに行った侍女が、もどってきて、そう言いました。

「きっと、頭がへんなんだわ」お姫さまは、こう言いすてて、歩き出しました。けれども、ほんのちょっと行くか行かないうちに、また立ちどまりました。

「芸術というものは、すすめてやったり、はげましてやらなければならないわ」と、お姫さまは言いました。「それに、あたしは皇帝の娘ですもの。あの男に、こう言ってちょうだい。あたしは、きのうと同じように、キスを十してあげます。あとは、侍女たちがしてあげますって」

「はい。ですけど、そんなこと、あたしたち、いやでございますわ」と、侍女たちは申しました。

「ばかなことを言うんじゃないよ」と、お姫さまは言いました。あたしだって、キスするのだもの、おまえたちだって、そのくらいのことできるでしょう。そのかわりね、おまえたちには、おいしいものや、お金をあげますよ」

　こうして、あの侍女は、またもや、はいっていかなければなりませんでした。

「お姫さまのキスを百！」と、ブタ飼いは言いました。「でないと、わたしのものは、なにもあげません」

「おまえたち、あたしの前に立っておくれ」と、お姫さまは言いました。侍女たちは、みんな、お姫さまの前に立ちならびました。それから、お姫さまは、ブタ飼いにキスをしはじめました。

「あの、下のブタ小屋のところには、あんなに人が集まっているが、いったい、どうしたことじゃ？」そのとき、露台に出てきた皇帝が、言いました。そして、目をこすって、めがねをかけました。「あそこでさわいでいるのは、どうやら侍女たちじゃな。どれ、おりていって、見てやろう！」

　こう言って、皇帝はスリッパのかかとを、ぐっと上げました。いつもはいている靴は、かかとをふみつぶしてしまって、スリッパになっていたのです。

　おや、おや、皇帝の早いこと、早いこと！　たいへんないそぎようでした。

　庭におりると、皇帝は、そっと、しのび足で歩きはじめました。侍女たちは、ブタ飼いのもらうキスが、多すぎも少なすぎもしないで、きちんと数だけもらうように、むちゅうになってキスの数をかぞえていましたので、皇帝のおいでになったことには、すこしも気がつきませんでした。皇帝は、のび上がって、ごらんになりました。

「いや、はや、なんたることじゃ！」と、皇帝は、ふたりがキスしているのを見て、言いました。そして、ブタ飼いが、ちょうど八十六回めのキスをもらったときに、かたほうのスリッパで、ふたりの頭を打ちました。

「出ていけ！」と、皇帝は、かんかんにおこって、言いました。

こうして、お姫さまも、ブタ飼いも、とうとう、この国から追い出されてしまいました。

お姫さまは立ちどまって、泣き出しました。ブタ飼いは、ぶつぶつ文句を言っていました。そのうちに、雨がざあざあ降ってきました。

「ああ、あたしは、なんてみじめな人間なんでしょう！」と、お姫さまは言いました。「あの美しい王子さまを、おむかえしておけばよかったのに！　ああ、なんてあたしは、ふしあわせなんでしょう！」

そのとき、ブタ飼いは近くにある、木のかげにいって、顔にぬっていた、茶色や黒のきたない色をふきとりました。それから、きたならしい着物をぬぎすてて、今度は、自分の王子の着物を着て、出てきました。さあ、こうなると、目もさめるほどりっぱなものですから、思わず、お姫さまも、王子の前におじぎをしないではいられませんでした。

「ぼくは、あなたをさげすまずにはいられません！」と、王子は言いました。「あなたは、りっぱな王子をむかえようとはなさらなかった！　バラの花やナイチンゲールの、ほんとうのねうちも、あなたにはおわかりにならなかった！　それなのに、おもちゃなんかのためには、ブタ飼いにまでもキスをなさる！　さあ、いまこそ、あなたは、そのばつをお受けになったのです！――」

こう言うと、王子は、自分の国へ帰って、門をしめ、かんぬきをさしてしまいました。ですから、今度は、お姫さまが門の外に立って、うたいました。

ああ、いとしいアウグスチン、
もうおしまいよ、なにもかも！

青空文庫情報

底本：「マッチ売りの少女　（アンデルセン童話集※［＃ローマ数字3、1-13-23］）」新潮文庫、新潮社
　　1967（昭和42）年12月10日発行
　　1981（昭和56）年5月30日21刷
入力：チエコ
校正：木下聡
2020年2月21日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ブタ飼い

ハンス・クリスチャン・アンデルセン　Hans Christian Andersen

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　矢崎源九郎訳
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/